

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19320059

研究課題名(和文) アナトリア諸語と印欧諸語の動詞体系の比較言語学的研究

研究課題名(英文) A Comparative Linguistic Study of the Verbal System in Anatolian and Indo-European Languages

研究代表者

吉田 和彦 (YOSHIDA KAZUHIKO)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90183699

研究成果の概要(和文)：印欧語およびアナトリア諸語の動詞形態論の諸問題についてこれまで提案されている見方のなかには、文献学的な立場からみれば、妥当性を欠くものがある。本研究プロジェクトによって、そのうちのいくつかについて、たとえば印欧語の動詞語幹形成母音の起源、ヒッタイト語の不規則な3人称単数中・受動態動詞、鼻音接中辞を取る動詞、1人称単数中・受動態動詞にみられる反復語尾の先史について、新しい歴史比較言語学的説明を施すことができた。

研究成果の概要(英文)：There are a number of inadequacies in the previous literature on the verbal morphology of Indo-European and Anatolian that can be solved in terms of recent developments of philology. As a result of this research project a new historical explanation was given to some of the unsettled problems such as the origin of thematic vowels in Indo-European verbs, irregular mediopassive verbs and nasal infixes in Hittite and prehistory of 1 sg. iterated mediopassive endings in Anatolian.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2008年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2009年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
総計	14,300,000	4,290,000	18,590,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：印欧語、アナトリア諸語、ヒッタイト語、比較言語学、動詞形態論

1. 研究開始当初の背景

アナトリア諸語は、印欧祖語に遡ると考えられる古い文法的特徴を多く保存しているために、近年の印欧語比較研究においても注目を受けている。とりわけ動詞体系の解明は重要な課題であるが、未解決な部分が依然として多く残されている。その大きな理由は、各言語の動詞形式を包括的に収集整理し、それぞれの言語の動詞体系内部でのそれらの位置付けを明らかにする作業を行う前に、い

きなり他の印欧諸語との比較分析に進んだからである。申請者は過去10年以上にわたり科学研究費などの助成を受けて、ヒッタイト語、象形文字ルウィ語などの動詞形態論にかかわるデータを収集するとともに、歴史言語学的な分析を進めてきた。またその成果を欧米の学会や学術雑誌において発表するとともに、海外の関連研究者を招聘して実質的な意見交換を行ってきた。その結果、アナトリア諸語を中心に据えた印欧語動詞体系の

総合的な比較研究を推進していく状況が整っていた。

2. 研究の目的

比較言語学の最も重要な課題は、同系統の諸言語の比較によって祖語を再建するとともに、祖語の段階から各分派諸言語が成立するまでの歴史を明らかにするである。研究の進展に大きな影響を与える要因のひとつは従来知られていなかった新資料の追加であり、もうひとつは新しい方法論の導入である。アナトリア語派の諸言語に関する文献学的研究のめざましい発展は、近年の印欧語比較研究に対して、量と質の両面から以前とは根本的に異なる視点を与えている。本研究の目的は、アナトリア諸語の動詞体系の研究からこれまで明らかにしてきた新たな事実、およびそこにみられる古い言語特徴に基づいて、従来再建されてきた印欧祖語を修正するとともに、他の印欧諸言語の動詞体系における未解決の問題に対して妥当な歴史的説明を与えることにある。

3. 研究の方法

アナトリア語派を中心にすえた印欧語動詞体系の比較言語学的研究を効果的、かつ有機的に推進するために、「印欧諸言語の基礎分析作業」、「アナトリア象形文字資料およびアルファベット資料の検討」、「アナトリア楔形文字資料の検討」、「研究のレビュー」、「研究の実質的推進・総括」という5つのユニットからなる研究体制を組織する。はじめの3つのユニットは基本的に独立して研究を進めるが、研究代表者と緊密に連絡を取り合う。また適宜、研究横断的な会合の機会を持つ。総合的な立場から研究の推進を行なうのは研究代表者であるが、各国の研究者との国際的な連携のもとで、レビューや助言を受ける機会を積極的につくる。さらに、内外の国際研究集会などに参加し、研究の成果を継続的に発信していく。

4. 研究成果

(1) ヒッタイト語の3人称単数中・受動態は、概して規則的につくられる。しかしながら、共時言語学的あるいは歴史言語学的にみた場合、その形成法に対して自然な説明を与えるのが困難な中・受動態動詞の形式がいくつかある。その典型的な例としてあげられるのは、*lagāittari* 'lies, is laid (low)'と *išhuwaitat* 'scattered'である。文献学および言語学的分析によって、これらの形式は語幹が-a-によって拡張された *lakai* と *ishuwai* という能動態に、後期ヒッタイト語において生産的な中・受動態語尾-ttari (現在) と -ttat (過去) が付与された結果、成立したことを明らかにした。

(2) アナトリア祖語の時期に、アクセントのある長母音の後、およびアクセントのない母音間で子音が弱化したことはよく知られている。この2つの子音の弱化規則は、アクセントのある長母音をはじめのモーラにアクセントのある2モーラ連続と再解釈すれば、直前のモーラに内在する[-stiff vocal folds]という素性がつぎの子音に広がる順行同化としてとらえることができる。また同じくアナトリア祖語の時期に生じた語末の-rの消失についても、直前のモーラが[-stiff vocal folds]という素性によって特徴づけられる場合に-rが消失したと考えれば、ヒッタイト語 *zinnattari* 'is finished'に代表される鼻音接中辞を持つ中・受動態3人称現在形が無理なく説明できる (**ti-n-h₁-ór* → **tinn ór* > **tinnó* → *zinnattari*)。

(3) Weiss (2009)は、1人称単数中・受動態の2次語尾として*-*h₂e* と*-*h₂eh₂e*を印欧祖語に再建した。彼の見方では、ギリシア語の1次語尾-*μοι*と2次語尾-*μην*は、それぞれ*-(*m*)-*h₂e-i*と*-(*m*)-*h₂eh₂e-m*という祖形から規則的に導かれる。しかしながら、ヒッタイト語においては重複語尾-*hhaha*は後期ヒッタイト語に特徴的であり、古期ヒッタイト語では生産的に使用されていない。この事実から、印欧祖語に*-*h₂eh₂e*が存在していたという見方は受け入れることができず、ギリシア語の-*μην*については別の歴史的説明が必要である。

(4) 印欧語比較研究における難問のひとつである動詞語幹形成母音-e/o-の起源についての研究を進めた。その結果、以下の知見を得ることができた。①語幹形成母音を持つ現在形は数多くみられるのに対して、印欧祖語に確実に遡ると考えられる語幹形成母音を持つアオリストは2例しかない。またゲルマン語にみられる語幹形成母音を持つ動詞は過去形にはみられず、現在形に限られている。これらの事実から、語幹形成母音は本来現在語幹に固有の特徴である。②さらに、ヒッタイト語には接尾辞を含む動詞以外に語幹形成母音を持つ動詞が存在しないことから、ヒッタイト語は祖語の古い特徴を保持している。他方、接尾辞をとみなわない語幹形成母音は他の語派における二次的発展による。③以上のことから、語幹形成母音-e/o-は能動態動詞現在語幹を形成する接尾辞-ye-に由来し、ヒッタイト語を含むアナトリア諸語が印欧祖語から離脱した後、この接尾辞に含まれている母音-e-が語尾の一部と再解釈され、接尾辞を取らない現在形に広がったことによって成立した。④大部分の印欧諸語では語幹形成母音がパラダイムのなかで-e-と-o-のあいだで交替するのに対して、ヒッタイト語の古い時期において能動態動詞は接尾辞-ye-によつ

て特徴づけられている。⑤この事実から、アナトリア諸語の離脱の後、アクセントが先行する閉音節の e が o に変化するという音法則が、残りの諸言語において作用したと考えられる。この音法則によって、動詞パラダイム内に語幹形成母音 -e- と -o- の交替がみられるようになった。⑥他方、トカラ語現在第3類とゴート語の語幹形成母音を持つ動詞においては、語幹形成母音はパラダイムを通して *-o- である。その理由は、これら2つのカテゴリーは能動態ではなく、中・受動態に遡るからである。その他の言語の中・受動態が語幹形成母音 -e/o- の交替を示すようになったのは、対応する能動態からの類推による。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 1 件)

- ① Kazuhiko Yoshida, "1st singular iterated mediopassive endings in Anatolian" *Proceedings of the Twenty-first Annual UCLA Indo-European Conference*. 231-243, 2010. 査読有
- ② Kazuhiko Yoshida, "Observations on the prehistory of Hittite *je/a*-verbs" *Ex Anatolia Lux: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of H. Craig Melchert on the Occasion of His Sixty-Fifth Birthday*. 385-393, 2010. 査読無
- ③ Kazuhiko Yoshida, "On the origin of thematic vowels in Indo-European" Kazuhiko Yoshida and Brent Vine (eds.) *East and West: Papers in Indo-European Studies* (Hempden Verlag). 265-280, 2009. 査読無
- ④ Kazuhiko Yoshida, "Another archaic linguistic feature in Hittite" *Studi Micenei ed Egeo-Anatolici*. 50: 851-859. 2008. 査読有
- ⑤ 吉田和彦、「二次的につくられたヒッタイト語中・受動態動詞」、『オリエント』51巻、46-68、2008、査読有
- ⑥ Kazuhiko Yoshida, "Hittite *pár-ḫa-at-ta-ri*" *Tabularia Hethaeorum*. 719-724. 2007. 査読有
- ⑦ Kazuhiko Yoshida, "Hittite *la-ga-a-it-ta-ri*" *Festschrift in Honor of Belkis Dinçol and Ali Dinçol*. 803-806. 2007. 査読無
- ⑧ Kazuhiko Yoshida, "Some irregular mediopassives in Hittite" *Proceedings of the Eighteenth Annual UCLA Indo-European Conference*. 129-141. 2007. 査読有
- ⑨ Kazuhiko Yoshida, "The morphological history of Hittite mediopassive verbs" *Verba Docenti: Festschrift for Jay Harold Jasanoff*.

379-395. 2007. 査読無

- ⑩ 吉田和彦、「歴史言語学の原点にある形態論——比較の対象の認定」、『言語』36巻8号、60-67、2007、査読無
- ⑪ 吉田和彦、「言語からみたインド・ヨーロッパ世界——多様化と収斂化」、『グローバル化時代の人文学——対話と寛容の知を求めて』(京都大学学術出版会)、171-193、2007、査読有

[学会発表] (計 2 2 件)

- ① 吉田和彦、「楔形文字ルウィ語 *tiwataniyatta* 'swored' および関連する形式」、第17回西アジア言語研究会、2010年12月4日、京都産業大学
- ② 吉田和彦、「日本語の文字体系の将来」、言語・文学委員会・科学と日本語分科会、2010年12月3日、日本学術会議
- ③ Kazuhiko Yoshida, "Historical Linguistics and Prosody", 共同研究会「言語の系統関係を探る—その方法論と歴史学研究における意味—」、2010年10月2日、国立民族学博物館
- ④ Kazuhiko Yoshida, "Notes on Cuneiform Luvian verbs in *-ye/o-", *Arbeitstagung on the Indo-European Verb*, 2010年9月13日、カリフォルニア大学ロサンゼルス校
- ⑤ Kazuhiko Yoshida, "A further aspect in the prehistory of Hittite *je/a*-verbs", Workshop "Historisch-Vergleichende Sprachwissenschaft", 2010年6月29日、ケルン大学
- ⑥ Kazuhiko Yoshida, "Proto-Anatolian as a mora-based language", Workshop "Historisch-Vergleichende Sprachwissenschaft", 2010年6月29日、ケルン大学
- ⑦ 吉田和彦、「ヒッタイト語 *ye/a*-動詞の歴史に秘められた謎」、第16回西アジア言語研究会、2009年12月6日、京都産業大学
- ⑧ Kazuhiko Yoshida, "1st singular iterated mediopassive endings in Anatolian" *The Twenty-first Annual UCLA Indo-European Conference*, 2009年10月30日、カリフォルニア大学ロサンゼルス校
- ⑨ Kazuhiko Yoshida, "The loss of intervocalic laryngeals in Sanskrit and its historical implications", 14th World Sanskrit Conference, 2009年9月2日、京都大学
- ⑩ Kazuhiko Yoshida, "On the prehistory of Hittite *je/a*-verbs", *The 28th East Coast Indo-European Conference*, 2009年6月13日、アイスランド国立大学
- ⑪ 吉田和彦、「楔形文字ルウィ語における *-ye/o-タイプの動詞」、第15回西アジア

言語研究会、2008年12月6日、京都産業大学

- ⑫ 吉田和彦、「アナトリア祖語とモーラ」、日本言語学会第137回大会、2008年11月29日、金沢大学
- ⑬ 吉田和彦、「印欧諸語」、西田龍雄先生傘寿記念リレー講演会「現代言語学の潮流と西田門下」、2008年11月22日、京都大学ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）
- ⑭ Kazuhiko Yoshida, “Hittite *-hḫahat(i)*, Lycian *-ḫagā* and Greek *-μην*”, VII. International Congress of Hittitology, 2008年8月28日、チョルム（トルコ）
- ⑮ Kazuhiko Yoshida, “Loss of word-final *-r* in Anatolian: A reformulation”, The 27th East Coast Indo-European Conference, 2008年7月21日、ジョージア大学
- ⑯ 吉田和彦、「楔形文字スペリングの解釈読むのか、読まないのか、それが問題だ——」、第57回羽田記念館定例講演会、2007年12月8日、京都大学ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）
- ⑰ 吉田和彦、「ヒッタイト語-*hḫahat(i)*、リュキア語-*ḫagā*、ギリシア語-*μην*の歴史的関係」、第14回西アジア言語研究会、2007年12月1日、京都産業大学
- ⑱ Kazuhiko Yoshida, “Proto-Anatolian as a Mora-based Language”, Indo-European Roundtable, 2007年10月23日、Kyoto University
- ⑲ Kazuhiko Yoshida, “On the Origin of Thematic Vowels in Indo-European”, Conference on Indo-European Studies, Kyoto University, 2007年9月11日
- ⑳ Kazuhiko Yoshida, “Final syllables in Germanic and Balto-Slavic”, 2007年7月5日、エルランゲン-ニュルンベルク大学
- 21 Kazuhiko Yoshida, “On the Origin of Thematic Vowels in Indo-European”, 2007年7月4日、エルランゲン-ニュルンベルク大学
- 22 Kazuhiko Yoshida, “Some Secondarily Formed Mediopassives in Hittite”, 2007年7月3日、エルランゲン-ニュルンベルク大学

[図書] (計1件)

- ① Kazuhiko Yoshida and Brent Vine, *East and West: Papers in Indo-European Studies*. Hempen Verlag: Bremen. 2009. 312pp.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 和彦 (YOSHIDA KAZUHIKO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90183699

(2) 研究分担者

大城 光正 (TERUMASA OSHIRO)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号：40122379
森 若葉 (MORI WAKAHA)
総合地球環境学研究所・プロジェクト上級
研究員
研究者番号：80419457